

いが、オランダの対日貿易は利潤のみを目的とし、相手国への文化的貢献は意図しなかったことも確かである。

C. Boxer "The Dutch seaborne empire 1600~1800" によれば、オランダの海外通商基地の中で、ベンガルと出島は最も悪名高き退廃した基地でもあった。その中で五名もの優れた医学者、臨床家、かつ高邁な精神の持ち主が来日したことは、日本にとって僥倖とも云うべき出来事であったのだ。

本書十一章は「ペルリ提督は日本の医学にも大きな衝撃を与えた」との題であるので期待して読んだが、内容はポンペの医学教育と日本人のオランダ語学習のことであり、著者の意図がよく分からなかった。表題がオランダ語の時代が去って英語の時代が予測され、蘭学者がやがて蘭字も無用になることの衝撃を受けたの意なら、それなりの事実を挙げて説明されないと、この題では読者は戸惑いを覚える。また蘭字に決定的打撃を与えたのは、明治政府のドイツ医学採用方針の決定であるから、それにも言及する必要がある。

本書を拝見して一いつ気になったことがある。著者がご自分の所論を支えるのに遠藤周作、吉村昭、司馬遼太郎らの作品を引用されていることだ。彼らは史実を良く調べ、勉強してはいるが、その作品はあくまでもフィクションであり、創作の意図に従って歴史事実を自由に取捨選択し、想像力でそれを繋ぎ合わせているので、それを歴史的価値あるものとすることはできない。吉村昭の『長英逃亡』は文学作品としては立派でも、高野長英の研究の参考にはならないので

ある。特に司馬遼太郎は傾向的な作家で、彼の民族主義的歴史観に都合のよい部分だけを歴史の中からつまみ食いしている。その作品を引用するのは余程慎重でなければならぬ。そうでないと著者は司馬史観の共鳴者なのかと疑われる危険がある。

それともう一つ、本文の中に諸先輩の所説を引用するのに、某々大学名誉教授という長い肩書きが目についた。著者の敬意とは別に、一般の読者にはなじみのない表現だと思う。詳細な年表と参考文献は有用である。

(大島 智夫)

〔築地書館、東京都中央区築地七―四―二〇、電話〇三―三五四二―三七三一、平成十二年三月十五日、A五判、二二―一頁、本体二〇〇〇円〕

瀧澤 利行 著

### 『健康文化論』

本書は、三十歳代の気鋭が健康文化に切り込んだ意欲作であり、まずはその労を多としたい。著者は「二十一世紀社会の健康問題を先導していく主要な概念の一つ」(九頁)として健康文化を位置づけ、その定義と内容と機能の解明を試みている。

本書は三部構成であり、第一部は著者が健康文化と考える

る情報や行動や制度さらには運動を、歴史的に検討している。本文二二〇頁のうち一〇七頁を費やしている。評者としては最も読んで興味深かった部分である。平安時代から江戸時代までの養生論を追った「健康文化としての養生論」、大日本私立衛生会による衛生思想普及がはらむ問題性を提示した「衛生思想普及」の文化構造、「保健同人」から「壮快」を経て『大丈夫』に至る健康雑誌の歴史を分析し三つの時期に区分した「健康雑誌の文化史」、石塚左玄の食養生主義から西式健康法、真向法、導引術などの民間健康法を紹介した「近代日本の健康法」、「白い巨塔」や「赤ひげ診療譚」など四つの小説をとりあげた「医療小説と健康文化」、以上の五章が第一部を構成する。

第二部は現在の健康文化に関する政策や動向を、ややアト・ランダムに扱っているが、健康文化の問題領域の広がりを理解するうえで有益であろう。ヘルス・プロモーションを扱った「健康づくりと健康文化の政策過程」、大衆の温泉利用の意義を論じた「大衆の生活伝統と健康文化の融合―温泉文化の健康活用」、自己形成を核として議論を展開した「セルフケア、ヘルス・ボランティアと自己形成」が第二部を構成する。

第三部は筆者の暫定的な理論的見地が示される。プラトーン、カントなどの西洋思想と道教などの中国思想が健康といかなる交差を示すかを略述した「健康文化を生み出す思想」、健康文化の暫定的な定義を示している「文化」概念と文化

の理論」、戦前の社会衛生学や労働者衛生運動を、健康文化の先駆者として見直す「健康文化理論の形成と展開」、そして結章として「健康文化の機能と展望」が置かれる。

著者は、普遍化された医学や医療とは異なった方法によって健康をつくり、維持し発展させようとする機能を持ち、その方法は個別性や経験性に依拠するという属性と、上記の過程で取り組みの主体が何らかの人間の価値を創造するという属性とを有する、「健康に関する文化」の総体を「健康文化」と規定する(二〇四頁)。この規定では、普遍化された合理的医学・医療(この内容の理解いかんによって、健康文化の意味も変わるようになるのではあるが)との区別が前面に出ているが、他方で著者は、「現在の健康文化の原理的特質」は、「科学的医学の進歩とおおむねその歩みをともし、それと協調しつつ、それを普及・啓発や実践化の側面で促進していく点」と、「科学的医学の論理や方法およびその結果を懐疑し、それらからの独立と一定の批判を指向していく点」という二つの側面を持つこととする。そして、本書が、やや雑多とも思われるさまざまな事象を取り上げたのは、深淺・広狭・強弱に違いがあっても、それらの事象が上記の二つの側面を包含しているからだという(二一六頁)。二〇四頁の記述と二一六頁の記述に、齟齬はないだろうか。

ともあれ全体を通読すれば、著者の関心が、科学的医学よりは民間医学、社会や国家よりは個人に向けられていることは明らかであり、この視点設定の功罪を考えながら読むの

も、本書との付き合い方ではなかるうか。

本書は、全体として、新分野への開拓的とりくみを行った労作であり、それが体系的の不足にもつながっていると思われる。例えば医療小説の次の章に健康づくり政策、その次の章は温泉という配列なども、問題の広さを反映するとともに、理論的整理の余地を示すものであろう。

最後に外国語の誤記がやや気になった。一二四頁 (Kultur-  
eren → Kulturieren) / 一二六頁 (preventive → preventative) /  
一二九頁 (Lebensformen → Lebensformen) / 二〇五頁  
(Hygienische → Hygienische) / 二〇七頁 (Umbelt →  
Umwelt) / 二〇八頁 (Arbeitsfahrt → Arbeiterwohlfahrt)。  
ht)。

(日野 秀逸)

〔大修館書店、千代田区神田錦町三二四、電話〇三―三二九  
四―二三五九、平成十年二月十日、A五判、二四六頁、定価  
二四〇〇円〕

芝木 秀哉 著

### 順天堂経験

——嘉永年間に於ける日本の医療の実録

關 寛齋〔文政十三年(一八三〇年)―大正元年(一九一二年)〕は、十八歳から四年間佐倉順天堂の学僕として調剤や診療助手などしながら臨床を学んだ。徳島の蜂須賀侯の侍医

となった彼は、戊辰戦争のとき三八歳で官軍奥羽出張病院頭取(野戦病院長)を務めた。順天堂経験と題した三三疾患(三六症例)の診療記録から、彼自身の経験と城舜海の処方など当時の医学水準と蘭学塾の医学教育を伺い知る事ができる。

解題には師の佐藤泰然の人となり、塾での医学教育、そして寛齋の生涯と松本(良順(泰然次男)、佐藤尚中らとの交友をかいま見る。

維新後徳島で開業したが明治六年に禄を返上し、平民の開業医關 寛(せき ひろし)となった。彼は貧者を救済して榮達を望む事なく北海道開拓に骨を埋めた。明治三十五年(七十二歳)資産を処分し、北海道陸別で困苦に耐えて關農場を開き自作農育成に務めたが、大正元年(一九一二年)阿片丁幾を服して自らの命を断った。八十二年の苛烈なる生涯であった。

芝木氏は順天堂大学所蔵の佐藤恒二本(全文翻刻)と、田中蔵書印のある順天堂外科実験(experience)である。experimentではない)と比較対照された。本編の参考文献のほかオランダ度量衡単位の記載も行き届いている。長崎で軍陣医学・海軍伝習を学んだ寛齋の肖像と原本、慶応四年(九ヶ月間)の病院日記(ともに自筆)、ハイステルの肖像とそのオランダ語の外科書・手術器械図なども載せてある。

第一例 排尿困難。(ゴム製カテーテル挿入を繰り返したが排尿なく、膀胱穿刺を行った。入門三年生の寛齋は泰然の